

# 問題解決的な学習に基づく小学校社会科の授業構築

—学習問題の構造に視点をあてて—

小林 隆

[抄 録]

「問題解決的な学習」が提唱され、各地の小学校で授業が実践されている。書籍や雑誌にも数多くの授業が報告されているが、問題解決的な学習に基づく全ての授業が社会科としての目標を達成できているかと言うと、それは否である。原因は、端的に言えば「学習問題」の設定と構造にある。

本論の目的は、社会科の学力・知識と学習問題を構造化した社会科授業モデルを構築することにある。そのために、社会科の目標構造を考察し知識の分類を提示した森分孝治氏、岩田一彦氏の論、社会科において問題解決的な学習を先導し学習問題の重要性を説いた北俊夫氏の論、社会科の学力と学習問題の構造化を試みた小原友行氏の各論を手がかりとした。成果として提示した社会科授業モデルは3つの学習段階に分かれている。「知る」ための活動・「わかる」ための活動・「生きる」ための活動<sup>1)</sup>である。そして、提示した授業モデルを基本的な視座として単元「水産業のさかんな地域」の授業を提案した。

キーワード：社会科授業，問題解決的な学習，学習問題，知識の分類

## 1. 問題の所在

子ども達の学習を深めるために「問題解決的な学習」が唱えられている。学習指導要領の今次改訂に先立つ中央教育審議会の答申でも、小学校社会科における改善の具体的事項が次のように述べられている。<sup>2)</sup>

生活科の学習を踏まえ、児童の発達段階に応じて、地域社会や我が国の国土、歴史に対する理解と愛情を深め、社会的な見方や考え方を養い、身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図る。

その際、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習を一層充実させることにより、学習や生活の基盤となる知識・技能を習得させるとともに、それらを活用して観察・調査したり、

各種の資料から必要な情報を集めて読み取ったりしたことを的確に記録し、比較・関連付け・総合しながら再構成する学習や考えたことを自分の言葉でまとめ伝えあうことによりお互いの考えを深めていく学習の充実を図る。

前段では社会科の目標に係ることが、後段ではそのための学習方法に係ることが述べられている。このような改善の方向性に基づいて各地で授業改善が行われているが、その現状に対しては、一般的に次のような問題点が指摘されている。<sup>3)</sup>

社会科授業なのに「社会」が見えていない授業が多い。対象とした事物・事象は見えても「社会」が見えない。

言い換えれば、例えば工場見学が「工場」学習に留まり、「工場」を通した日本の工業の学習に発展していないのである。この指摘にあるように、『「社会」が見えていない』授業であるから、答申にあるような「社会的な見方や考え方」や「よりよい社会の形成に参画する資質や能力」が養われていない授業が、実は数多く実践されていると判断できる。

つまり、各地で問題解決的な学習に基づいた授業が構築され実践されているものの、社会科としての目標に達していない場合が数多く報告されている現状が指摘できるのである。

本論文では、以上のような問題意識に立ち、社会科の目標や、答申にある社会科授業改善の方向性を十分に達成できる授業の構築を目指す。

## 2. 学習問題の設定とその課題

問題解決的な学習が未成熟である原因は、社会科の学力や知識と学習問題の関連が未整理な点、授業において学習問題が構造化されていない点の二点にある。

学習問題とは、子どもが問題解決する学習テーマのことである。<sup>4)</sup> 社会科の授業を管見すると、「～について調べよう」「～の工夫や努力を調べよう」「どのような～」などの学習問題により社会事象の表面的なことを調べ、まとめ、交流させて終了する事例が多い。学習問題に関しては、旧文部省初等中等教育局教科調査官として問題解決的な学習を先導した北俊夫氏が次のように述べている。<sup>5)</sup>

（略）学習問題は、「スーパーマーケットのひみつを調べよう」とか「ごみはどのように始末されているか」といった事実を認識するための学習問題では不十分である。（中略）「ごみの始末をなぜ市の仕事として行っているのか」といった学習問題の方が、子どもの思考が誘発される。社会の仕組みや働きが認識できるような学習問題を設定することによって、社会

認識が一層深まり、社会の形成にかかわろうとする意識や態度も育っていく。

このように、社会科の学習問題は、社会の仕組みや働きが見えてくる必要がある。社会的  
事象として現れる具体的事項の観察から社会の本質を探究していく学習問題の設定が求めら  
れるのである。北氏は、その著書の中で、学習問題を「事実追究型」「論理的追求型」「探検型」  
「意思決定型」「作業・体験(的)型」の5類型に分類している。本論では5年生の「水産業  
のさかんな地域」の授業を提案するので、5年生の学習問題に絞って、以下に具体例を示す。<sup>6)</sup>

① 事実追究型

- ・米作り農家では、いまどんな問題をかかえているでしょうか。
- ・日本のどこでどのような養殖業がおこなわれているのでしょうか。

② 論理的追求型

- ・なぜ、北海道や東北地方では米作りがさかんに行われているのでしょうか。
- ・自動車は、どのような方法や順序で大量に生産されているのでしょうか。

③ 探検型

- ・八百屋さんには、どこからどんな野菜やくだものが来ているのか、聞きに行こう。
- ・新聞社をたずねて、会社のなかのようすや仕事の仕方を見てこよう。

④ 意思決定型

- ・これからの日本の農業のあり方を考えてみよう。
- ・新聞やテレビなどは、どのように活用したらよいだろうか。

⑤ 作業・体験(的)型

- ・わが国の工業地域の分布のようすを、日本の白地図にまとめよう。
- ・自動車工場のようすをパンフレットにまとめよう。
- ・はまちを育てる「いけす」のもけいを作ろう。

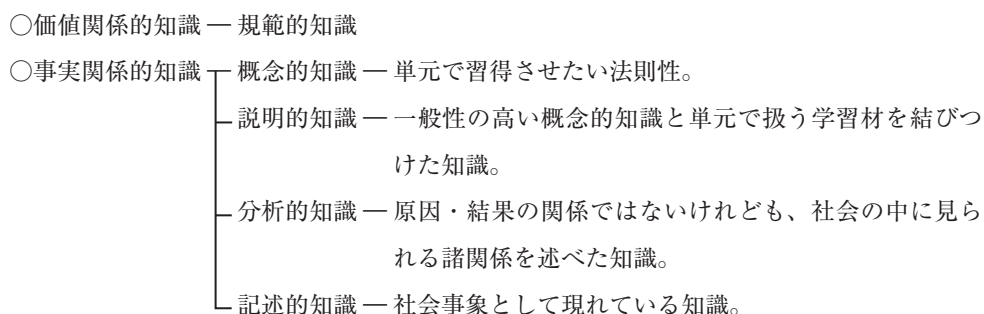
以上のように、北氏は社会科授業における学習問題の重要性を指摘すると同時に社会科実  
践事例から学習問題を抽出し、5類型に分類・整理した点で評価できる。しかしながら、社  
会科の目標や学力構造との関連でこれらの学習問題を体系づけていないところに課題が残る。

### 3. 社会科の学力構造と学習問題

#### (1) 社会科の知識構造

「学び方を学ぶ」などと方法的知識や技能などが重視された前学習指導要領への反省から、  
知識や論理的思考力が再び重要視されている。社会科における知識は、例えば森分孝治氏や  
岩田一彦氏<sup>7)</sup>が分類・構造化している。それを整理すると図1のようになる。

図1：知識の分類と構造



岩田氏は、さらに「構造化された知識が問いの過程に転換できれば、社会科授業過程の設計ができる」<sup>8)</sup>と知識の構造と問いの関係の重要性を社会科授業設計との関連で述べている。そして、「問いと知識」として問いの種類と獲得される知識の関係を提示している。しかし、管見したところ、社会科の学力と関連する具体的な問いの過程までは提示されていない。

## (2) 社会科の学力と学習問題

社会科学学習目標の観点と関連させて学習問題の過程を提示しているのが小原友行氏である。小原氏は『「思考力・判断力・表現力」を育成するための4つの活動』として、図2の活動を提示している。<sup>9)</sup>

図2：「思考力・判断力・表現力」を育成するための4つの活動

- ① 「知る」ための活動 — 資料から必要な情報を集めて読み取る。  
どのように、どのような
- ② 「わかる」ための活動 — 社会的事象の意味・意義を解釈する・事象の特色や事象間の  
関連を」説明する  
なぜ、どうして
- ③ 「生きる」ための活動 — 自分の考えを論述する  
どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか

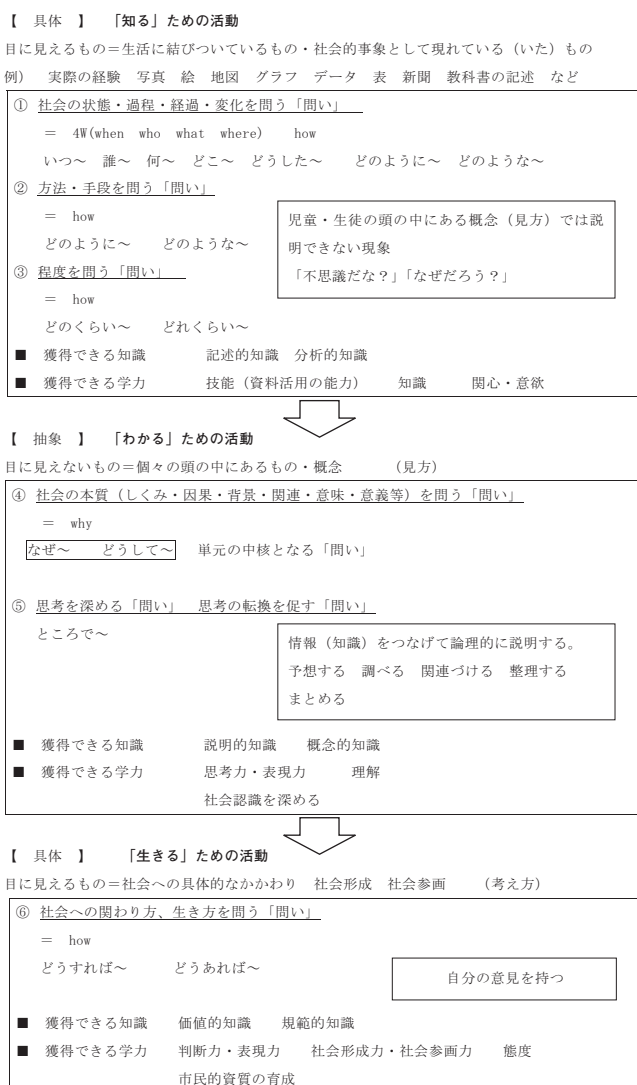
社会科は社会認識形成を通して市民的資質を育成する教科と一般的に解されているが、①②の活動を通して社会認識形成がなされ、③の活動を通して市民的資質が育成されると解釈できる。さらに小原氏は、思考力を育成する段階を「わかる」ための活動、判断力を育成する段階を「生きる」ための活動に位置づけている。「知る」ための活動は「わかる」ための活動の前に位置づけられているが、学習にあたっては社会的事象の中から多くの情報を読み取り、そこに「なぜ、どうして」という学習問題が生まれなければ論理的思考は深まらない。

つまり、このように学習問題を構造化することによって深い社会認識形成が達成できるのである。以上のような小原氏の論は、社会科の学力と学習問題の構造を整理していく上で有意と判断できる。

#### 4. 問題解決的な学習における学習問題の構造

以上を総合すると、問題解決的な学習における学習問題の構造は図3のようにまとめることができる。図には、それぞれの学習段階での設定が考えられる具体的な学習問題と、そこでの獲得が期待される知識や学力を整理・体系化している。

図3 : 社会科授業モデル【問題解決的な学習における学習問題の構造】  
(森分孝治氏・岩田一彦氏・北俊夫氏・小原友行氏の論を参考に筆者作)



以下では、図3を授業構築の基本的な視座として、具体的な社会科授業を提案する。

## 5. 学習問題の構造に視点をあてた社会科授業構築の実際

### 社会科学学習指導案

1. 日時 平成 ○○年 ○月 ○日（ ○ ） 第 ○ 校時
2. 学年 第5学年 ○組 ○○名
3. 単元名 水産業のさかんな地域
4. 単元目標

○身近な事例（食べ物・人々の取り組みなど）から水産業に関する関心を持ち、「問い」をもって日本の水産業の特色や課題を探究し、今後の有り様を提案することができる。

#### 【関心・意欲】

○「問い」をもって日本で古くから水産業がさかんな理由、最近の漁獲量が減少している理由などを考え、自身の言葉や文章で説明することができる。また、日本の今後の漁業や食糧確保の有り様を自身の言葉や文章で提案することができる。自身と他の児童の意見の違いに気づき、さらに考えを深めることができる。

#### 【思考・判断・表現】

○数値データや統計などの基礎的資料を読み取り、地図帳を活用して水産業のさかんな地域を指摘することができる。また、数値データや統計、グラフなどを読み取り日本の水産業の特色や課題を指摘することができる。そして、そこから「問い」を導き出すことができる。

#### 【技能】

○日本の水産業について漁獲量や主な漁港、漁場などの分布、従事している人々の工夫や努力・苦労などを学習し、水産業の発達や課題は自然的条件や社会的条件と深い関わりがあること、水産業は国民の食料の確保に重要な役割を果たしていること、そのために様々な取り組みがなされていることを指摘することができる。

#### 【知識・理解】

### 5. 単元観

本単元は、学習指導要領第5学年の内容『(2)「我が国の農業や水産業について、次のことを調査したり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、それらは国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかわりをもって営まれていることを考えるようにする。」ア 様々な食料生産が国民の食生活をささえていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること。イ 我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色な

ど。ウ 食料生産に従事している人々の工夫や努力。』を受けたものである。

日本の水産業は恵まれた自然環境（地形や海流）を生かして営まれ、古くから国民の食生活と密接なかかわりをもっている。言い換えれば、日本の水産業はその自然的要因と社会的要因から発達してきた重要な産業である。そして、その形態は個人経営の沿岸漁業、沖合漁業から企業経営の遠洋漁業、栽培漁業まで様々である。漁業別漁獲高は沖合漁業が最も多くなっているが、総合的に見て漁獲高は年々減少してきている。原因は、自然環境の悪化による漁業資源の減少などの自然的要因や国民の食生活の変化、漁業従事者の離職・高齢化などの社会的要因にある。しかしながら、水産業は国民の生活を支える重要な産業に変わりない。現在、漁業技術の改善や水産資源の保護、育成を図るための栽培漁業、新たな漁業資源の開発などの取り組みがさかに行われている。

本單元では、自然的要因や社会的要因から日本の水産業の特色や課題を明らかにするとともに、水産業に従事する人々の工夫や努力、苦勞などを学習する。そして、今後の水産業や食料確保のあり方を考えていくことがねらいである。

## 6. 児童観

私たちは毎日、たくさんの水産物を消費している。子どもたちも家庭での食事や給食で様々な水産物を食しているが、それらの水産物がどこから運ばれてくるかに思いを巡らすことは少ない。また、京都府南部は内陸部に位置しているため、水産業に従事する人々の姿を思い描くことがあまりなく、水産業の実態について実感的に理解している児童は少ない。ただ、児童にアンケートをとったところ、海や川で釣りをしたことのある者が過半数おり、魚の名前もよく知っている。認知度の高い水産物は、「あじ」「たい」「まぐろ」「いか」「いくら」「あさり」「かき」などであった。

大きな視点で見ると、日本が世界的に見て水産物の消費が多い国であることや水産業のさかんな国だということを知っている児童は少なく、水産業が毎日の食生活を支える重要な産業であることを認識している児童も多くない。漁獲量については、約半数の児童が「減っている」と予想している。その理由は、「環境が悪くなったから」「地球温暖化」「魚を獲りすぎたから」などを挙げている。「増えている」と答えた児童は、「卵をたくさん産むから」「釣りをしたときにたくさん釣れたから」などと理由を挙げている。太平洋や日本海は認知度が高いが、世界の海に目を向けている児童はいなかった。

5年生の社会科では、中学年の地域学習から発展して国土の自然や産業について学習している。前單元では「我が国の農業」を主食である「米」を中心として学習した。具体的には、地図や数値データ、統計資料などを読み取り、「なぜ～」という「問い」をもって日本の米作りの特色や課題を自然的要因と社会的要因から考察した。本單元も基本的な授業構成は変わりなく、農業の学習から類推できることも多いと考える。ただ、基礎的な資料の読み取りは

できつつあるが、そこから「問い」をもって社会事象の意味や意義、しくみやつながり、因果関係などを論理的に考察していく力は、まだまだついていない。また、客観的根拠に基づいた自身の考えを言葉や文章で表現していくことも今後の課題である。

## 7. 指導観

単元の導入では、児童になじみの深い「回転ずし」を取り上げる。「回転ずし」のネタには様々な水産物があるが、例えば、「あじ」「いわし」「さんま」などは沿岸・沖合漁業、「まぐろ」などは「遠洋漁業」、「たい」「はまち」「かき」などは栽培漁業が中心である。また「回転ずし」は、輸入されている水産物や新たな水産資源としての「ネタ」も導入されており、日本の水産業の特色や課題を総合的に捉えていく際に活用しやすい教材といえる。このような身近な事例から「日本では、毎日どれだけの水産物を食べているのだろうか」「何をどれくらい食べているのだろうか」「どこで獲れるのだろうか」という「問い」を引き出す。

単元の展開Ⅰでは、主に水産業に係る自然的要因の学習をする。まず、地図や数値データなどを用いて水産業のさかんな地域（主な漁港など）を沿岸漁業・沖合漁業・遠洋漁業・栽培漁業などの漁業形態別に整理する。そして、「なぜ、そのような地域で水産業がさかんなのか」を考察し、地形や位置、海流などとの関係を明らかにする。

単元の展開Ⅱでは、水産業に係る自然的要因と社会的要因を総合的に学習する。まず、水産業のさかんな地域の典型事例である八戸市の漁業を取り上げ、「なぜ、1日にこんなにも多くの魚を水揚げできるのか」「なぜ、1日にこんなにも多くの水産物を出荷できるのか」の「問い」から、水産業に携わる人々の工夫や努力、苦労などを考察していく。次に、「なぜ、とる魚にあわせて漁法を変えたり、魚を獲りすぎないようにしているのか」「なぜ年々、漁獲高が減少しているのか」の新たな「問い」から、自然環境の悪化や水産資源の減少、漁業従事者の離職・高齢化、日本人の食習慣の変化、輸入量の増加などの課題を明らかにする。

単元の展開Ⅲでは、「なぜ、漁をする人たちが山に木を植えているのだろうか」の問いから、安定した魚業発展のための環境改善の取り組みを具体的に学習する。このような取り組みは地元の南山城村でも行われており、水産業の将来を自分たちの生活やまわりの環境と関連づけて考えていくことができる。このように栽培漁業の実際を、身近な事例と典型的な明石市の事例から学習する。

単元のまとめでは、「将来も水産物を安心して食べて行くには、どうすればよいか」を考え、自身の言葉と文章で発信していく。

これらの学習を通して、我が国の水産業は自然環境と深いかかわりをもって営まれていること、国民の生活を支える重要な産業であることを考えるようにする。



9. 単元の指導計画

	学習内容	学習問題と学習活動	評価の観点
1・2	・身近な水産物 ・水産物の消費量 ・主な漁港とその位置	・回転ずしのネタには何があるのだろうか？ ・回転ずしのネタはどこで獲れるのだろうか？ ・日本では、どれくらいの水産物を食べているのだろうか？ ・毎日食べている魚はどこで獲れるのだろうか？	・身近な水産物を挙げることができたか。 ・数値データから水産物の消費量を読み取ることができたか。 ・地図帳を活用して白地図の「主な漁港」を記入することができたか。 【技能】 【知識・理解】
3	・日本の漁港の分布と水産業と概要 ※その特色と自然的要因	・主な漁港では、何が、どれだけ獲れるのだろうか？ ・なぜ、日本は水産業がさかんなのだろうか？ 予想 確かめ 交流 振り返り	・水産業がさかんな理由を地形や海流、位置などとの関係で説明できたか。 【関心・意欲】 【思考・判断・表現】 【知識・理解】
4	・日本の水産業の具体事例（八戸市の水産業）① ※その特色と社会的要因	・八戸港は、どれくらい漁獲高なのだろうか？ ・なぜ、1年間にこんなにも多くの魚を水揚げできるのだろうか？ 予想 確かめ 交流 振り返り	・水産業に携わる人々の工夫や努力、苦労などを指摘することができたか。・港湾の整備など、国や地方自治体の取り組みを指摘することができたか。 【思考・判断・表現】
5	・日本の水産業の具体事例（八戸市の水産業）②	・八戸の漁業は、どのような漁法なのだろうか？ ・なぜ、とる魚にあわせて漁法を変えたり、魚を獲りすぎないようにしているのだろうか？ 予想 確かめ 交流 振り返り	・水産業に携わる人々の工夫や努力、苦労などを指摘することができたか。・水産業の課題を自然環境の悪化や漁業資源の減少などの自然的要因から指摘することができたか。 【思考・判断・表現】
6	・日本の水産業の課題 ※自然的要因と社会的要因	・日本ではどれくらい魚を獲ってきたのだろうか？ ・なぜ年々、漁獲高が減少しているのだろうか？ 予想 確かめ 交流 振り返り	・水産業における課題を自然環境の悪化や漁業資源の減少などの自然的要因や漁業従事者の離職や高齢化、日本人の食生活の変化などの社会的要因の統計資料などから指摘することができたか。 【技能】 【思考・判断・表現】
7	・つくり、育てる漁業の取り組み①	・なぜ、漁をする人たちが山に木を植えているのだろうか？ 予想 確かめ 交流 振り返り	・植樹活動と水産業のかかわりについて説明することができたか。 【思考・判断・表現】
8	・つくり、育てる漁業の取り組み② (明石市の水産業)	・つくり、育てる漁業は、どこでさかんなのだろうか？ ・つくり、育てる漁業は、どのような漁業なのだろうか？	・安定した水産物の供給について、事例を元にして説明することができたか。 【技能】 【知識・理解】

「問題解決的な学習」に基づく小学校社会科の授業構築（小林 隆）

9	<p>・これからの水産業</p>	<p>・将来も水産物を安心して食べて行くには、どうすればよいのだろうか？</p> <p>自身の考え 交流（学習班の考え） 交流（学級の考え）</p>	<p>・これまでの学習を振り返り、自然的要因と社会的要因を根拠として、今後の水産業のあり方を文や絵などで提案することができたか。</p> <p>【思考・判断・表現】 【知識・理解】</p>
---	------------------	--	--

10. 本時の目標

植樹活動と水産業の関わりについて調べることにより、水産業と自然の深いつながりに気づき、水産業の発展のためには山・川・海の環境保全が大切であることを、根拠を明確にして説明することができる。

11. 本時の指導計画

	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導 入	<p>■南山城村の植樹活動</p>	<p>■植樹活動のVTRと写真、植樹面積の数値データ等から南山城村の植樹活動の概要を読み取る。</p>	<p>■大がかりな植樹活動であることに着目させる。</p> <p>【技能】</p>
	<p>■学習問題の設定</p>	<p>なぜ、漁をする人たちが山に木を植えているのだろうか？</p>	<p>■植樹活動をしている人が漁師（水産業関係者）であることに着目させる。</p> <p>【関心・意欲】</p>
展 開	<p>■予想</p> <p>■確かめ 南山城村の植樹活動 木津川の植樹 木津川漁業協同組合の取り組み</p> <p>■宮城県の植樹活動</p> <p>■学習問題の解決</p>	<p>■予想する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアではないか。</li> <li>・町同士の交流ではないか。</li> <li>・環境を良くするためではないか。</li> <li>・漁業と関係あるのではないか。</li> </ul> <p>■確かめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・漁業との関係を確認する。</li> <li>・具体的にどのような関係があるかを調べる。</li> <li>・プランクトンを育てる栄養が森林の腐葉土から川を通じて海に流れ込む。</li> <li>・腐葉土を増やすために植樹する。</li> <li>・プランクトンが増えると海が豊かになる。</li> <li>・宮城県から始まった取り組みである。</li> <li>・漁獲高がどれくらい多くなったか。</li> <li>・品質がどれくらい良くなったか。</li> </ul> <p>■調べたことを総合して、学習問題に対する説明文を考える。</p>	<p>■前時で扱った明石市の栽培漁業を振り返らせる。</p> <p>【思考・判断・表現】</p> <p>■南山城村と宮城県の事例を具体的に調べさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料</li> <li>・インターネット</li> <li>・理科、国語の単元とも関連させる。</li> </ul> <p>【技能】</p> <p>■まずは、自力解決をさせる。</p> <p>■学習班で調べたことを交流させる。</p> <p>■個→学習班と交流を広げる。</p> <p>【思考・判断・表現】</p>
振 り 返 り		<p>■学習問題に対する説明文を交流する。</p> <p>川や海の環境を良くして漁獲量を増やすために植樹をしている。水産業を発展させるためには森も豊かでなくてはならない。</p>	<p>■学級で交流し、思考を深めさせる。</p> <p>【思考・判断・表現】 【知識・理解】</p>

## 6. おわりに

本論文の目的は、社会科の学力・知識と学習問題を構造化した社会科授業モデルを構築することにあった。そのために、社会科の目標構造を考察し知識の分類を提示した森分孝治氏、岩田一彦氏の論、社会科において問題解決的な学習を先導し学習問題の重要性を説いた北俊夫氏の論、社会科の学力と学習問題の構造化を試みた小原友行氏の各論を手がかりとした。成果として提示した社会科授業モデルは3つの学習段階に分かれている。「知る」ための活動・「わかる」ための活動・「生きる」ための活動である。そして、提示した社会科授業モデルを基本的な視座として単元「水産業のさかんな地域」の授業を提案した。

社会科授業モデルの図中にも示したが、本モデルに基づく授業は社会科の目標を達成できるだけでなく、「思考力・判断力・表現力」や「言語活動の充実」、「社会形成力・社会参画力」といった新学習指導要領のキーワードにも対応できるものである。

しかしながら、学習者は必ずしも指導者の意図した通りに思考を働かせる訳ではない。今後は学習者の思考活動や知識獲得に視点をあて、発話や作品、交流を質的に分析することを通して学習者の実態を明らかにしたい。そして、学習者の実態に合わせる形でより授業モデルの整合性を高めていきたい。

### 〔注〕

- 1) 小原友行『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン－小学校編－』明治図書 2009 p10
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説－社会編－』東洋館出版社 2008 p4
- 3) 關 浩和『学力の質的向上をめざす社会科授業の創造』明治図書 2005 p11
- 4) 北 俊夫「学習問題とは何か・なぜ必要なのか」『社会科教育』No.589 2008.6 p10
- 5) 北 俊夫 同上書 p11
- 6) 北 俊夫『社会科学習問題づくりのアイデア』明治図書 2004 pp.50-61
- 7) 岩田一彦『社会科固有の授業理論 30 の提言－総合的学習との関係を明確にする視点－』明治図書 2001 pp.45-47  
他に、岩田一彦『小学校社会科の授業分析』明治図書 1993  
森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書 1978 を参考にした。
- 8) 岩田一彦 同上書 p49
- 9) 小原友行 前掲書 pp.8-13

### 〔付記〕

・「水産業のさかんな地域」の学習指導案作成にあたり、米澤佳子氏（公立小学校教諭）のアイデアを一部参考とした。

（こばやし たかし 教育学科）

2010年10月12日受理

